カトリック高松教区報

２０１３年１月１日（第１５２号）
発行所　カトリック高松司教区　広報委員会
〒760-0074　高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成：　yousei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

マザー・テレサの言葉

わたしが、
イエス様を、
見つけねばならなかったのではありません。
イエス様が、
わたしを見つけて下さったのです。

諏訪榮治郎司教　年頭書簡

「信仰年」を生き続ける新しい年を迎えました。皆さま新年明けましておめでとうございます。

諏訪榮治郎司教

〃船は舵を大きく切った〃

広大な宇宙に浮かぶ「宇宙船地球号」は今、至る所でうめき声と涙が流され、不安が充満している状況です。

教皇ベネディクト16世はこの年も「信仰年」（2012年10月11日～2013年11月24日）とし、痛みと不安の中で祈る私たちに第2ヴァチカン公会議の精神と教えを、どのように受け止め歩むのかを問いかけておられます。

昨年はちょうど第2ヴァチカン公会議（1962年10月～1965年2月）の開幕から50年目に当たる年でした。カトリック教会という世界最大の船は舵を大きく切り変え、自己変革の着実な歩みを世界に示し続けている途上にあります。それは20世紀最大の出来事と言われています。

この公会議の精神の浸透をはかるため、教皇ヨハネパウロⅡ世とマザーテレサが来日（1981年）され、カトリック教会のみならず、社会に福音の光と励ましを注がれたのが30年前のこととして記憶にあります。

〃節目の年に希望持って〃

それに応えるべく、第1回福音宣教推進全国会議（1987年）が開催され「開かれた教会」への模索と刷新の歩みに拍車がかかり、今25年目の途上にあります。また公会議の30周年を記念して「カトリック教会のカテキズム」が発布されて20年になります。

私たち一人一人が神の子としての恵みを理解し、誰を信じ、何を信じているか、どう生きるのか、絶えず内面から新たにされるため出版されました。

また「キリシタン禁教令」が続く徳川幕府末期、横浜外国人居留地に「天主堂」と書かれた聖堂が建てられ（その献堂3年後・1865慶応元年・大浦天主堂でキリシタンの発見を迎えることになった）「再宣教」が開始されて150周年にあたります。さらに今年2013年は高松教区設立（1963年9月13日）の50周年にも当たります。このように日本のカトリック教会にとって節目に当たる年を迎えることとなりました。

ここで改めて私たちキリスト者には「希望」がある事を確認したいと思います。将来がどうなるのか危惧致しますが、希望の人は人生の全てが、良い御方の御手の中にあると知り、かつ信頼してこの今と、ここを生きます。

歴史上の偉大な霊的生活のリーダーたちはみな、希望の人でした。アブラハム、モーゼ、ルツ、マリア、シャルダン、そしてマザーテレサ。これらの人々はみな、未来がどのようになるかを正確に知る事を必要としませんでした。彼らはただ心の中に一つの福音の約束を抱いて生き、その約束によって未来へと導かれていたのでした。

信仰年を歩む「対話する教会」

高松教区設立50周年を迎えて

高松教区桜町司教座聖堂

返すのではなく、現実の諸問題に奉仕する教会の現代化を考えたのでした。教会が福音の奉仕者となるための霊性を公会議は「対話の精神」としていたのです。

「対話の精神」とは何か、と問われた時、いわゆる井戸端会議は「話題」と「会話」の楽しさにありますが、それは話題の楽しさよりもむしろ、目の前にいる「あなたの存在」そのものが大切なのだと考えます。『父が私を愛されたように、私はあなたがたを愛した』（ヨハネ15章9節）と言う福音を思い起こしたいと思います。

イエスはわたしを「あなた」と呼びかけ、存在としての「あなた」を愛したと言われるのです。それは愛されるにふさわしい価値を身にまとった「わたし」ではなく、むしろ傷付き破れた「わたし」を丸ごと「あなた」と呼んで下さるのです。

何の飾り気もない飼い葉桶に置かれた幼子が「あなた」をありのままに受け止め「人格」として見て下さるのです。神が「対話」して下さるのだと聖書は言うのです。

〃「あなた」と呼ぶイエス〃

ヨハネ23世の第2ヴァチカン公会議への呼びかけは、従来の教えを繰り

ここに対話の精神が明らかに見えるのです。信仰と生活の中心である「父と子と聖霊の名によって」という三位一体の神秘も、まさに対話の精神そのものを表します。御父と御子の永遠の交わりと愛の対話から私たちに遣わされる聖霊は、まさに父と子の「対話」に私たちを招きいれ、神との一致を願う神の働きかけといえるのではないでしょうか。（ロマ書8章15～）。

〃教会はキリストの体〃

洗礼によってキリストに結ばれた私たちはキリストの祭司職、預言職、王職（奉仕職）に招かれ「神の民」とされます。『それゆえ尊厳性に於いても行為に於いても真に平等であり、それぞれ固有の立場と任務に応じて、キリストの体の建設に協働する』（教会法典208条）と述べられます。教会はキリストの体（交わり）としてあることが宣言されます。このことから信徒、修道者、司祭の協力、協働において宣教がなされるのは当然のことといえます。

昨今言われる「協力・共同宣教」とは宣教の一方法論ではなく2千年続いた教会の本質、対話の姿なのです。一人では味わうことの難しい聖書の言葉でも、一人一人に働く聖霊によって御ことばを分かち合う対話の時、神の愛の豊かさと広がりに触れる事が出来るのです。

また神の民は聖霊の働きを共に識別するのです。これが「小教区評議会」であり、対話の場としてあるのです。司祭、司教はその「奉仕」のためにあります。ここに対話の精神という霊性が重要な鍵になるのです。

〃苦しむ人の側で生きる〃

『御ことばは肉となって、私たちの間に宿られた』（ヨハネ福音書1章14）神の御子が人間の歴史に介入され、慎ましく生まれたと言うのです。

誰も気づかない谷間のような現実を生きる人々と同じ目線に立つことを神は望まれたと言うのです。『現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、とりわけ、貧しい人と全て苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもあるのです。

この共同体は自らが人類とその歴史とに、実際に深く結ばれていることを自覚している。』（現代世界憲章序）

この序文は、イエスのたとえ話として語られたあのサマリア人を思いおこします。大災害に打ちのめされた「あなた」の傍らに走り寄る事は、対話の精神といえるでしょう。大きな災害があっても無くても谷間に生きる人々を忘れないこと、傍らにいることは教会の本質でもあります。

神の愛の結晶として生命をいただいた一人一人の尊厳を大切に守るよう、教会は対話の精神を通して社会に奉仕するよう招かれています。教会のみならず現代に生きる私たちはこの霊性、「対話の精神」（交わり）を日々深めていくことを信仰年の基本的課題と考えます。

司教と心ひとつに　全司祭と面談　秋の司祭集会

本部事務局長
西川康廣助祭

10月31日（水）、カトリック四国会館において秋の司祭集会が開催された。高松教区で働く司祭・助祭・修道者、合わせて25名が参加した。

「信仰年開幕」（10・11）に当たり、まず司教団から司牧者へのメッセージ、「信仰年を迎えるにあたって、日本の教会の課題」（2012年10月11日）を全員で読み合わせた後、高松教区でいかに「信仰年」を生きるかについて意見交換した。

その中で今、新しい福音宣教を考える時期が来ている。

紀元2000年の大聖年を機に、毎年のように年間目標が定められ、その都度会議が増え教会活動はイベント化して来ている。司牧者はゆっくり腰を据えて霊的養成に専念準備できない。信徒も日曜日の家族の交わりの時間をもう少し大切にすることによって、初めて福音宣教に繋げることが出来るのではないかという意見や教会の現状に非常に危機感を感じるという厳しい意見も出た。また「カトリック教会のカテキズム」を、司祭・助祭・修道者・信徒を交えた、地区やブロック密着型の講座として企画したいという意見も出た。

よりそいホットライン
■0120-279-338

そして高松教区の最大の目標は、教区の再生と一致であることに変わりはない。そこへ向けて継続的に取り組んで行くことを再確認し、そのためにも司教は教区で働く全司祭・助祭・修道者との個人面談を行い、司教と心を一つにして教区の課題に取り組んでいくことを確認した。

午後は一般公開講演会

講演会ではNPO法人レジリエンス代表の中島幸子氏をお招きし、一般公開の特別講演会を司教座聖堂で開催した。

講演テーマは、「自分も隣人も大切な心を育む」と題して、DVについてさまざまな側面から話され、被害者が孤立しないように、言葉の慎重な選びと、苦しんでいる人の立場に立った細かな配慮、そして命の尊さを理解するために、「あなた」は何にもまして大切な人である、ということを伝えてあげることなどと話された。

はばたき

明けましておめでとうございます。今年も主の平安がすべての人々の上にありますように。我が家の玄関脇のツバキのつぼみもふくらんで、正月を彩ってくれそうです。

私たちは今、信仰年を歩んでいます。昨年は高松教区の4県で『教区民の集い』が開かれました。そこで私たちは何を考え、何を得たのでしょう。

『つどい』を前に諏訪司教様から二つの課題が出されました。一つは『どんな教会になりたいか』の深まりの継続、もう一つはそれぞれの信仰を確認し深めるための「ダイナミックメモリー（信仰の目で自分の人生を振り返る）」の黙想でした。

『つどい』では分かち合いもそれにそって行われたものと思います。教会づくりについては働き手の少なくなっている困難な中で工夫しながら実践する事例も熱く語られ、分かち合いでは参加者がそれぞれの人生で出会った苦しみや喜びを語り合い、聴き合う小さな共同体ができていました。

4県それぞれの四つの種類の果実が生まれているはずです。それはどのようなものでしたか。信徒減、高齢化、若者の減少などに直面し、宣教する力の衰えが感じられる中で、四国の地をキリストの光で照らしていくために私たちはどうすればよいのでしょう。

多くの課題を抱えた年の始めですが、神様に救われて生きる私たち信徒一人ひとりが信仰の喜びと希望を持って、諏訪司教様のお導きの中で今年の信仰年を歩んで行きましょう。

信仰のめぐみ語り合った　４県で教区民の集い

対話深め信仰を再確認

◇◇高知地区◇◇

秋晴れの朝、集いの参加者が江ノ口教会に集まって来た。今年の集いは敢えて発表、研修、講演会形式を採らず、「信仰体験をつげるひとに」を主テーマに黙想会形式とした。皆が聖堂内でゆったりと寛いでいると、ギター伴奏によるテゼの祈りが始まる。　黙想の静かな雰囲気の中、諏訪司教は教区民の集いの趣旨に関する講話で、第２バチカン公会議開幕50周年、カトリック教会のカテキズム発行20周年、日本26聖人殉教者列聖１５０周年と、３つの記念年に当たり、「信仰年」にふさわしく、神の民（教会）として個々の固有のダイナミック・メモリーを分かち、告げて欲しいと話された。

講話される諏訪司教

昨年、「どんな教会になりたいか」で、具体的な目標として掲げた教会像に従って、４つの分科会に分かれる。６～８人の小グループが８つ出来た。そのうちの１つは在日フィリピンの方が主のグループが出来た。

本地区での2回目の養成コースを経て完成した各人のメモリーや幸福曲線を基に、順次ゆっくりと話し、分かち合った。自分を再確認するとともに隣人をも理解する力を得た体験である。参加者にとって２時間もの分かち合いがが普段の主日ミサ後の茶話会とは全く異なったものと感じた。

はまゆう会館に一堂に集まっての昼食の後、１年ぶりに帰高された司教様の健康にも感謝しての「信仰年」開始ミサで、現実の社会に派遣され、高知地区「教区民の集い」は幕を閉じた。

宮本　匡士

感謝のうちに信仰年感謝ミサ

◇◇愛媛地区◇◇

教会づくり熱心に語る

愛媛地区の『教区民のつどい』は諏訪榮治郎司教をはじめ県内の司祭、修道者、信徒ら２２０人が参加し、道後教会を会場に行われた。

９教会の代表がこれからの教会づくりについて熱心に話し、分かち合いではそれぞれの人生を振り返り語り合い、信仰を深め合った。

開会式では道後教会の川上栄治神父が歓迎あいさつ、愛媛地区長のファン・マヌエル神父が祝辞の後、各教会、修道会の出席者紹介があり、諏訪司教の講話でつどいが始まった。

諏訪司教は第２バチカン公会議から50年を経て、日本の教会もようやくその精神がわかるようになってきた。そして教会憲章に述べられている『神の民としての教会』『教会とは秘跡』『対話する教会』などについて話した。ナイスを経て『交わり、証しする教会』が見えてきたとする。教会づくりはコンビニのような画一化されたものではなく、『私たちの教会』を大事にしてほしいと説いた。それぞれの地域の文化や伝統を大切にした中での『交わり』『証し』ができる、そんな教会のあり方を選べばよいと示唆した。

続いて県内の９教会代表が２年前のつどいで表明した『こんな教会を目指します』がどう具体化されてきたのかをそれぞれ発表。高齢化、信徒減、若者減、働き手の減少という共通の悩みを抱えながら、『信仰』『共同体』『社会への働きかけ』への教会としての取り組みについて熱く語った。

その中では隣接幼稚園の保護者や園児とのかかわりの大切さや東北の被災者支援活動の実践のほか未信者対象のキリスト教入門講座を開設し参加者があったことなどが話された。また最近の動きとして増加する外国国籍の信徒との交流の大切さも話された。

午後から分かち合いが15グループに分かれて開かれた。出席者は自分の人生を振り返り、神様との触れ合いを語り合い、共感の輪が広がった。

『子どもプログラム』も設けられ、幼稚園年長組から小学６年までの子どもたちが『遊びながら学ぶ「ミサってな～に?」』のテーマで楽しく神様のことを学ぶひと時を過ごした。

15グループで分かち合い

続いて司教ミサがあり、子どもたちは手づくりの人形や神様への手紙を奉納、演奏や歌も披露した。参加者たちにとって実りの秋にふさわしい一日となった。最後に愛媛地区宣教司牧評議会の城和雄会長が閉会あいさつし、集いを終えた。

丸尾　修
丸尾　修

なごやかに分かち合い

◇◇香川地区◇◇

秋晴れの日曜日、11月４日豊かな自然に囲まれた霊性センター（風の丘）において香川地区教区民の集いが行われ、約１２０名の信者が参加した実りある大会だったと思います。

熱心に「聴く」集い参加者

会は司教さまの講話、詩編による黙想、分かち合いと続き、最後に感謝の祭儀でフィナーレとなりました。

この日採り上げられた詩篇１３９はとりわけ神様が一人ひとりをどれほど心にかけ、いつもそばに寄り添い、慈しみで包んで下さるかを述べられた箇所で、あらためてじっくり思い起こし、味わう事ができ、貴重な時間を過ごせました。

また、この詩編から黙想へと導いて下さった、村上神父さまの講話は穏やかな声と話しぶりの中に、ご自身のゆるがぬ信仰とあつい心が伺われ、染み入る思いで聞かせていただきました。

その後　数人ずつのグループに別れて分かち合いに入り、各司会者の指導のもと、各人がそれまでの人生で神様が、どんな時、どんな風に関わって下さったか、体験などを中心に、思いつくまま話し、また聞かせてもらう和やかな交流の場となりました。　お互い初対面ではありながらも、同じ信仰に生きる兄弟姉妹としての無言の親密感とでもいうような親しさを感じての対話は、やはり教会ならではのものだろうと思います。

今回の集いに参加して、信仰というものは、頭で考えるものではなく、日々の日常を生きていく生活そのもの、近くの人に対する言葉、態度に滲み出てくるものでなければならないと言うことに改めて気がつきました。あたたかく受け入れるまなざし、何でもないようにふるまう親切など、近い人であればあるほど、親しい人であればあるほど難しい事だけれど、神様の愛はまずそんな行いの中に光り始めるのだろうと思います。

すぐ目の前に見ている人を愛せないのに、どうして遠くの人を、見えない神を愛せるだろうか。　イエス様のそんな言葉を思い出しながら帰路につきました。

今回のセンター（風の丘）での開催は初めての人も多く、場所の案内や会場整備に一方ならぬご苦労もあったことと思いますが、この自然の中での神様との対面は得がたいものであったと思います。

多田美佐江

話し聴き共同体を実感

◇◇徳島地区◇◇

３教会から集い祈りと黙想

時雨の中、聖ヨゼフ鳴門、聖パウロ・三木徳島、希望の聖母阿南の３教会から四十数人が阿南教会に集まった。

初めに諏訪司教様は「みんなと一緒に過ごせるこのひと時は有難く嬉しい」と挨拶され気持ちの輪を温められた。

続く祈りと黙想を通して、これまで一人一人がしてきた内省を、徳島地区の意義に位置付けるよう林神父が指導された。

「教会は、イエスが人々と交わり伝えられた神の愛を引き継ぎ伝えて行く共同体であり、目に見えないが、イエスの霊に生かされているのが私たち一人一人であるから、そのダイナミック・メモリの実りが教会共同体の営みになっていく。」と説かれた。

続くグループになっての話し合いには「『私の教会』から『私たちの教会』に心を拓いて相手の話すことを拝聴しよう」と進展を図られた。

ここで、一同「徳島地区の祈り」を唱えて７グループになって分かち合いミーティングに入り、各々いまある自分と信仰の恵みと教会との繋がり、働きなどを啓いて行った。

そこからおのおのは、多少に拘わらず、福音宣教する教会の初心を自分のこととしようとする響きを実感し合えたに違いない。

昼食を挟んで、「クレド・ドミネ」の練習で思いを味わい、午後を諏訪司教様指導の「信仰年ミニ黙想」で始め、聖堂に移動して「徳島地区信仰年開始ミサ」を捧げ、主と共に働く心の力を主から授かり、ほっとして一日を終えた。

乾　盛夫

信仰年によせて　多くの交わりに感謝する日々

私は洗礼を受けて11年になります。母がプロテスタントの信者で教会学校に通っていたこともあり、幼少のころからキリスト教を身近なものとして受け入れてはおりました。一方で中学・高校時代に音楽や文学の影響でカトリックの存在を知りましたが、当時は漠然とした「憧れ」以上の思いはなかったと記憶しています。

井原淳史氏

長野県の大学に入学したころからカトリックの教えを本格的に学び始め、１年後に洗礼を授かりました。それからほどなくしてオルガニストとしての奉仕、中高生会のスタッフの役割を頂き、ミサ以外の多くの面で教会とかかわる機会を与えて頂きました。

今の私自信を省みて、信者というには余りにも未熟で迷いの多い歩みであると思います。と云うよりもむしろ、洗礼を受けてからの方が、かえって日常生活や信仰の面で、多くの迷いを経験したと云ってよいかも知れません。それでも何とか歩んで来ることが出来たのは何故かと、考えてみると、神様の恵みはもとより、神父さま方をはじめ、教会の多くの先輩方の祈りと励ましに支えられてきたからではないかと、最近よくそう感じます。

最近、新居浜教会に移り、献堂75周年のミサに与ることが出来ました。新しい地でも、オルガン、青少年の集いなど、多くの交わりに関わらせて頂いているのも、本当に感謝です。これまで受けてきた恵みを、これからは多くの人と分かち合うことが出来るよう、改めて祈りの内に歩みたいと思います。

新居浜教会　井原淳史

告　知　板

カトリック高松教区
―第４回「女性の会」大会―
テーマ：「命をつなぐ、女性と平和」
期日：2013年1月12日（土）10:00～15:00
場所：カトリック坂出教会
講師：松浦悟朗司教（大阪教区）

聖ドミニコ宣教修道女会

小教区紹介
八幡浜教会（愛媛）

八幡浜教会は、愛媛県の西南部八幡浜市の中心地にあり、ＪＲ八幡浜駅より徒歩10分程の昭和通りにあります。

昭和９年（１９３４）頃、宇和島教会のイシドロ神父様が時々八幡浜へ来られるようになり、昭和10年（１９３５）に教会用として民家一軒を借りて定期的に八幡浜を訪れ、布教活動も活発化しました。まもなく、マルシャノ神父様が引き継ぎ、昭和12年（１９３７）６月にもう一軒の日本式家屋を借り２階を司祭館とし、正式に『カトリック八幡浜教会』として出発し、初代主任司祭としてマルシャノ神父様が就任しました。

昭和25年（１９５０）９月に、今の教会堂が建設され、11月には八幡浜聖母幼稚園も併設し、途中改築を経て現在に至っています。

教会活動としては、主任司祭の岩﨑武神父様とともに、第一日曜日の勉強会、第三日曜日の定例会、ご復活やクリスマスのパーティー、年に一度の宇和島教会との親睦会などを行っています。

今年の宇和島教会との親睦会は、八幡浜教会近くの自然豊かな日土地区で、石窯焼ピザ作り体験を通して親睦を深めました。

八幡浜教会は、とても小さいですが家庭的で落ち着ける雰囲気の教会です。

お互いが祈りによって支え合いながら、信仰を守るのに困難な社会の中で、これからもがんばっていきたいと思います。

人気の石窯焼きピザ

ちょっと　ひといき

人われは祈るしかなしこの夜のマリアの御子を静かに見つめ
沫雪の華こそ咲きて眉山に真白が冴ゆる日の射すところ
成すべきを成さざりしこと人の世の痛みの如く雪は降りくる
この庭を雪の清めし朝に来て小鳥は瑠璃色の声で啼きたり
水仙の香りがすっと立ち上がる薄氷ふみて近よる朝に

芙蓉

ひと　教会の大黒柱を生きる
阿南教会　松本幸子さん

松本さんは長年に渡り、教会の財政や行事、信徒間の連絡など、何から何まで実務的な事をやってもらっていて、影で教会を支えている大黒柱です。

そのせいか両肩はカチカチ。体はあちこち故障に病気。私の妻は、時々感謝と申し訳ない気持ちで肩揉みをしてあげています。その度に、あなたのは肩凝りとは言えないと、軟弱な私は責められます。

そんな松本さんを支えているのは共同体時代に培われた信仰だと聞きました。息ぬきは太った猫とガーデニング。自宅に伺った時、手入れの行き届いた庭で幸せそうにしている猫の姿を見て、松本さんの人柄を感じました。

どうか私達阿南教会のためにも、無理をしないで、元気でいてください。

渡部康雄

神学生便り
ご降誕を待ち望み新年を迎える

哲学科２年　ヨゼフ神学生

日本では、一年が春夏秋冬の四つの季節にはっきり分けられ、いろんな行事が行われます。

たとえば、春にはお花見、夏には七夕、秋にはお月見、冬にはお正月などです。四季がはっきりしている日本だからこそ楽しく待ち望むことが沢山あります。

ところで、カトリックの典礼暦においては、年間を除き、教会の一年間に待降節・降誕節・四旬節・復活節の四つの季節がありますので、まずは待降節について考えてみましょう。

「待降節」は「待つ」時期と言われます。赤ん坊が生まれるのを待つお母さんは、誕生に向けて日々準備していきます。子供はクリスマスのプレゼントをもらうために毎日指折り数えて過ごしながら、待ちます。わたしも子供のころ、待降節が近づいてくると、クリスマスのプレゼントをもらう時期も近づき、楽しく待っていました。しかし、プレゼントをもらう前に、「やってほしいことがある」と母から頼まれました。

それは告解（赦しの秘跡）のことでした。因みに、母は私に物質的なものを望むだけではなく、精神的なものも望みます。

確かに主イエス・キリストが来られることを待ち望むために、私たちは外見の準備をすること、あるいはイルミネーションを飾ったり、綺麗な服を着たりすることばかりではなく、中身の準備をすること、あるいは希望を持つことや赦しの秘跡を受けることや善いことを行うことなどをも大切にしたいと思います。

わたしたちも、主の誕生を漫然と待つのではなく、貧しい人々、恵まれない人々のために、何かささげもの、犠牲、プレゼントをしながら待ちました。そうして、私たちは素晴らしい降誕祭はもちろん、よい新年をも迎えることが出来たことと思います。

最後に、今信仰年を過ごす私たちが神の力によって、強められ、素晴らしい降誕節と良い一年を過ごすことが出来るように心から願っています。

『典礼奉仕』のために ⑲
「香部屋を管理すること」

高松教区典礼委員長　レナト・フィリッピニ

皆さんは、香部屋がどういう部屋なのか知っていますか。入ったことはありますか。そこは、香部屋の係、あるいは神父だけに立ち入ることが許されている部屋ではありません。

香部屋に入って、だいたいすぐ目に入るのは洋服ダンスでしょう。そこには祭服、つまり白い服や典礼の４色のカズラなどが保管されています。しかし、１人の司式司祭によってミサが捧げられているのに、古くて余分な枚数や歴代の司祭の忘れ物があるかもしれません。変色や型崩れ、そして汗染みが見られる祭服があるかも知れません。まだ間に合います。クリーニングに出しましょう。ミサのためにはいつも、ピカピカで真っ白の祭服を装いたいものです。これも香部屋の１つの準備です。

香部屋は、典礼祭具が保管される場所です。使わない物があれば香部屋は物置になってしまいます。本棚にはラテン語典礼書、古い「聖書と典礼」が引き出しの中や典礼書に挟まれていることも多くあります。12年前の「聖書と典礼」のパンフレットを発見したこともあります。必要ないものです。それより、朗読聖書（ミサの時、みことばが朗読される本）を大事にしましょう。例えば、みことばに対して尊敬を表すために綺麗な布地で表紙を作ったらどうでしょうか。

聖週間の準備のために、いつも慌てて、準備をしていませんか。「聖木曜日の洗足式で使うタライはどこでしょうか」。待降節リースですが、収める箱にちゃんとその中身を書きましょう。同じく復活徹夜祭の時、会衆のために使うロウソクや、洗礼式のための白衣など、それぞれの場所に収める図を作っておくと、後で必要な時、誰にでもすぐ分かるでしょう。

香部屋について一つのたとえが浮かんできました。どのレストランの厨房も調理中は、混雑していますが、すべて終わったら全部片付けて、きれいにするでしょう。香部屋も同じです。ミサが終わっても、香部屋を片付けていないなら、典礼の奉仕はまだ終わっていないと思います。ミサ、典礼は、香部屋から始まり、香部屋で終わるといっても過言ではないのです。

香部屋ツアーはいかがだったでしょうか。是非自分の教会の香部屋を見て、「私にできることがないか」と自分に問いかけてください。香部屋を上手に管理するために、裏方の協力も欠かせません。例えば祭服、祭壇布、杯拭きなどの洗濯とアイロンかけや掃除など、また「聖書と典礼」のパンフレットを日曜日ごとに仕分けしておくことなどもあります。

切さと必要性も強く感じました。受け身的にゆだねるのではなく、もっと前向きにゆだねる生き方が出来れば、フィリピンやカンボジアと比べて、大切なものが見えにくくなってる日本でも、より豊かに生きていけるのではないかと思います。

橋本　直人

自分自身を考える時間が必要なんだ

時の流れが非常に早く「忙しい」場所で生きている中で、ゆっくりじっくり自分自身を再考する「ボーっとする時間」が必要なんだと気付いた。

「世界」とは何か、何が良く、何が悪いのか、分かち合いを通してじっくり考えることができた。

日常生活の中で、何が正しく、どう行動・判断するか、勇気をもって動く重要さに気付いた。

若い力　遠くにいる隣人
◇高松教区 青年の集い◇
ブラザー八木信彦

高知 中島町教会の祭壇の前で

11月17日（土）～18日（日）、カトリック中島町教会で「青年の集い」が行われました。高松教区内外から20人の青年、ＪＬＭＭ（日本カトリック信徒宣教者会）から2名、諏訪司教様の参加もありました。表題をテーマに、特に同じアジアで生きる素朴な人たちと共に活動をしているＪＬＭＭや青年と分かち合いました。

大切な何かを失いがちな今日において、彼らの発表を機に、もう一度私たちの原点に立ち返り、神さまの望まれる生き方を共に模索できたようなひとときでした。

つながりを大切に　懸命に生きること

今回、フィリピンツアーの話をさせてもらいましたが、前回に行ったのが２年前ということもあり、その時は考え、感じていたはずの事を忘れていたり、意識できなくなっていたことに気づきました。

ＪＬＭＭの方の報告やカンボジアに行った学生の方の話しと感想を聞いて、自分の頭からうすれていたものを再確認出来たと思います。

人が笑ったり、喜んだり、幸せを感じる為に必要な物は本当は少ないはずなのに、それに気づきにくい日本社会の中で、人の幸せの根本にある人とのつながりをもっと大切にしていく事、未来を見て動くのも大切ですが、その前に今日を、今を全力でいっしょうけんめいに生きる事を忘れないようにしたいと思います。

ゆだねるという事の大切さと必要性も強く感じました。受け身的にゆだねるのではなく、もっと前向きにゆだねる生き方が出来れば、フィリピンやカンボジアと比べて、大切なものが見えにくくなってる日本でも、より豊かに生きていけるのではないかと思います。

橋本　直人

司教と共に和気あいあいの食事

また、迷った時に、教会、イエス・キリストを思い起こして、行動すること。そして人との出会いの素晴らしさ、分かち合いの重要さにも気づかせてもらった。

高橋　隆

医療のともしび（36）

聖マリア、今も臨終のときも　祈り給え

認知症を病むと、認知の障害は進行し、深まっていく。ところが幸か不幸か、感情領域の障害は、認知障害と並行して同じように低下するわけではない。もし世間の大方が誤解しているように、「ぼければ、何もわからなくなるから本人は楽なものだ。周囲は困り果てるのだが―」という考えが正しいようなら、つまり知的能力の低下と並行して、感情障害も深まり感情が枯渇していくのならば、彼らはそんなに追いつめられないですむのかもしれない。しかし実際は全く違う。

認知症を病む人たちの多くは、徐々に「できないこと」が増えていくのだが、一方でそのことを漠然とではあれ感じる能力は保持されている。自分が人に迷惑をかけていることも、自分が周囲からどのようにみられ扱われているかということも、彼らはとても敏感に感じとっている、そして不安に陥り、怯えている。

『彼らは個々のつまずきには恬淡たる態度をとって、心配する周囲を鼻白ませることが多いのだが、ときに暗澹たる表情で「ぼけていく」「消しゴムで消していくように（記憶が）消えていく」「暗い穴に落ちていくようだ」などといい、周囲に返す言葉を失わせるようなことがある。』　小澤 薫＜認知症とは何か＞より。

私自身が高齢となり、物忘れ、思考の乱れが多くなり、医師としての私が、自分自身を、認知症なのか、老人性の物忘れなのか考えている今日この頃である。聖マリア今も臨終のときも祈りたまえ。

カトリック医師会　橋本 雍

教区スケジュール

1月
1日（火）元日　神の母聖マリア　祭　世界平和の日
2日（水）聖バジリオ　聖グレゴリオ（ナジアンズ）司教教会博士（記）
6日（日）ご公現の祝日
12日（土）女性の集いin坂出
13日（日）主の洗礼（祝）司祭評議会in塩江（13日～14日）
14日（月）成人の日
20日（日）年間第２主日　（エキュメニカルの日曜日）
21日（月）（青少年）釜ヶ崎訪問（～22）
26日（土）宣教司牧評議会役員会 13:00
27日（日）年間第３主日
2月
2日（土）主の奉献　（祝）
3日（日）年間第４主日
6日（水）司祭評議会12:00
10日（日）年間第５主日
11日（月）建国記念の日
13日（水）灰の水曜日
17日（日）四旬節第１主日
24日（日）四旬節第２主日

支援の豆腐 納豆はいかが

桜町教会　鈴木和枝

サアサ皆さん、「亘理豆腐」を買ってください！

ある老夫婦が日曜日のミサの後、桜町教会の玄関で『亘理豆腐』や『納豆』を販売しています。

それは東日本大震災６ヶ月後の昨年９月１１日のことです。その老夫婦は岩手県奥州市の水沢教会（義母の出身）と奥州市共催で『後藤寿庵（４００年前，近くを流れている胆沢川に堰を造って水を引き，砂漠のようだった荒れ地を水田にかえたキリシタン）４００年記念式典』に参加しました。その直後、奥州市主催『溝部司教様の後藤寿庵についての講演』を聴講しました。それから盛岡、陸前高田、大船渡、釜石と震災によって甚大な被害を受けた地域を巡って仙台市に着きました。ニュース等で各地域の被害の様子を見聞きしてはいたのですが実際に見てその被害の大きさに驚かされました。

毎回完売　ありがたい皆さんの協力

豆腐も順調な売れ行きの様子

仙台市では八木山教会の野田ご夫妻から『豆腐の話』を聞きました。

「宮城県の南部の亘理地方は津波によって農地が海水につかり、稲作を断念せざるを得なくなりました。しかし幸運にも、海水をかぶった農地でも大豆は栽培できることが確認出来ました。そして収穫した大豆をマルト食品株式会社（豆達人）が継続的に買い上げてくださることが決まりました。このことによって、農家の方々の営農意欲が高まると共に地域の方々の雇用も確保されるので、災害復興対策として期待されています。義援金としての募金もとてもありがたいことではありますが、私たちのもとに来るまでにとても時間がかかる上、地域産業の継続的な復興に直接結びつきにくい面もあります。

全国の教会が亘理地方の大豆商品購入に協力してくだされればこの地域の復興に大きな力となります。

野田ご夫妻の話を聞いた老夫婦は、自分たちも「東日本の継続的復興のお手伝いしよう」と心に決めました。自分たちは年齢の割に神様より健康のお恵みを頂いているので、お手伝いすることによって、かえって心の平和を味わえることが出来るからです。

今まで４回程販売し、皆様のご協力により毎回完売しています。豆腐、納豆とも最高品と喜ばれています。

これからは毎月最終の日曜日のミサ後に販売し、東日本大震災で被災された方々へ真心の支援を届けたいと願っています。皆様、どうぞ奮ってお買いあげ下さい。

ＴＳＣ便り

昨年も、個人、グループそして小教区単位でと、教区民の皆さまを挙げての支援を続けて頂き、高松教区サポートセンターとして心から感謝申し上げます。

時間の経過と共に支援への機運が当初に比べて薄れて来ていますが、皆様方の温かく変わらぬご協力は力強く続いています。

また、冬の到来で、ボランティア活動が自然と制限されることや、何かと障壁となることがたくさんありますが、私たち高松教区は小さくても有益で個人として容易に参加できる「お米券キャンペーン」を引き続き行って参りましょう。

＊これまでの大船渡ベースの活動状況を記録したＤＶＤを各小教区宛に配布しています。積極的に活用し、今後の支援に役立てて下さいますように。

主の御降誕を周りの人々と祝う

桜町教会　朗読劇と音楽の夕べ

12月2日桜町聖堂において朗読劇と音楽の夕べが開催された。第1部は司祭によるクリスマスメッセージを以て幕を開けた。つづく朗読劇”蟻の町のマリア”は、イエスが身を以て小さな貧しい人々に尽くす愛の姿と、その愛を現実の世界で実践された北原聡子さんの姿とを重ね合わせることを通して、各々自分にできる奉仕へと人々を招いた。

教会学校の子どもとさくらコール

第２部は”音楽の調べ”と銘打ち、社会で音楽活動をされている方々の協力得て、バッハのオルガン曲や、マリンバそしてクラリネットによる演奏が続き、最後に桜町教会学校の子どもたちと桜町教会聖歌隊さくらコールによるクリスマス聖歌の響きがプレゼントされた。

「蟻の街のマリア」の1シーン

クリスマスは周りの人々を教会に招く絶好の機会だ。毎年待降節にはこうした催しやコンサート等が企画されているが、そこに留まらず、招かれた人々への積極的な宣教姿勢を示すべきと云う声に、もっと真剣に向き合う時が来ている様に思える。

桜町教会で「聖骸布展」

キリスト受難を黙想

桜町小教区では、去る10月13・14（土・日）に、サレジオ会員ガエタノ・コンプリ師による聖骸布の講演会と写真展を開催しました。

コンプリ師は東京都調布市にあるチマッティ資料館の館長であり「聖骸布」の研究は６０年以上に及びます。

当日は実物大の聖骸布写真を展示し、スクリーンを使用しながら丁寧に解説して下さいました。

写真をよく見ると布の真ん中から半分には、顔、肩、胸、手足等、反対側の半分には、後頭部から足までが見えています。身長は１８０～１８３cm、姿をより細かく見れば手と足に釘によると思われる傷の跡があり、

額と後頭部には茨の棘のようなもので刺された多くの傷跡があり、胸には大きな刺傷と出血、背中と体中には無数の鞭打ちの跡が見られ、まさに聖書のイエス・キリストの受難を思わせるものがありました。

驚いたのは、その布が写真でいうと「ネガ」の状態であることです。その布を写真機で撮影すると鮮明な人物の姿が表れるというものだったのです。

聖骸布の信憑性については、様々な意見がありますが、私達は今回、一般の方々のキリスト教への関心へのきっかけ、信者の方々にはイエスの死と復活の神秘への黙想にと考えました。

聖骸布は私のように見ないと信じられない人間に対し、主が物的証拠としてわざわざ残されたものではないのかと私には思えました。終わりに、他小教区からの多数のご参加に深く感謝申し上げます。

桜町教会　生涯養成委員会　高橋宏輔

推　薦　映　画　紹　介

『レ・ミゼラブル』

ミュージカル劇として27年間という驚異的なロングランを続けるフランスの文豪ヴィクトル・ユーゴーの大河小説。　延べ６千万人を超える観客を動員した不朽の名作が、このたびミュージカル映画としてスクリーンに登場した。この作品には人の「生」につきまとう様々な人間模様が描かれている。

しかしその基底を流れるのは、神への信仰に基づく信頼と受容、赦しと祈り、そして根底からの回心である。「人は新しくなれる」、そしてそれは善意と受容を介しての神との「決定的な出会い」によるものであることを、この重厚な映画は強調する。スピードと簡便さがもてはやされる今日、特に若い世代の人々に観てほしい映画である。

12月21日からワーナーマイカルシネマなどで全国一斉ロードショー！

カトリック中央協議会・秘書室　広報

編集後記

典礼暦年と共に太陽暦も新しい年が始まりました。

トップ記事にもありましたが、今年は色々な節目の年です。生活のすべてを、社会での立場を信仰をもとに見直すチャンスとしての恵みと受け止めていきたいものです。

今年も一年、教区の方向性を見極めながら教区報編集に携わって参りたいと思います。教区民の皆様のご協力を宜しくお願いいたします。（J）

内　科　胃腸科　循環器科　放射線科
医療法人　翼 医院
Tsubasa Cl.
高松市茜町16-12 ☎(087)837-5800

医療法人社団聖心会　阪本病院
わたしたちは、患者様の立場に立った全人医療を行い、地域の皆様に愛され信頼される病院を目指します
院内保育園完備

整形外科・脳神経外科・泌尿器科
皮膚科・外科・消化器外科
肛門外科・乳腺外科・形成外科
呼吸器外科・呼吸器内科・内科
リウマチ科・放射線科・リハビリテーション科・麻酔科
〒769-2602
香川県東かがわ市川東103-1
☎0879-25-1121（代）
http://www.idn-hcg.co.jp/sakamoto/

私たちは、自分を創造しようとするこどもをまなび、護りましょう
暁 の 星 学 園
鳴門聖母幼稚園　高知聖母幼稚園
阿南聖母幼稚園　海の星幼稚園